サタンはゴールドヘルファイアイモリ・シロップについて書かれていた図鑑を閉じると、深くため息をついた。
「・・・悪魔を骨抜きにする媚薬・・・。」
「ああ。それも人間に対してのみ発動する強烈な媚薬。な。」
サタンは本を図鑑を足元の元あった場所に戻すと少しの間をおいて視線を伊吹の方に向けた。
「・・・どうりでお前を見ていると体が熱くなる訳だ・・・。」
「え？」
まだ状況が上手く理解できていないのかきょとんとした顔でサタンを見る伊吹に顔を向けるとサタンは再び深いため息をついた。
「ゴールドヘルファイアイモリ・シロップの効果はかなり絶大らしいな。正直お前が側にいるだけでおかしくなってしまいそうなのが自分でもよく分かる。」
「へ？おかしくなる？」
「・・・こういうことをしたくなる気分。ということだ。」
サタンは伊吹の両手をつかむと大量の本で壁のようになった場所に押し付け強引に唇を奪った。
「ん！」
伊吹は最初抵抗に続くかと思わせるような声を上げたが、サタンが唇と唇を何度かこすり合わせ上唇と下唇を交互に軽く唇で挟む愛撫を行うと徐々に体の力を抜いた。
サタンは一度唇を離すと伊吹の顔をじっと見つめた。
伊吹の顔は完全に戸惑いの感情を示していたが、その目には薄い膜が張りサタン同様欲情をかき立てられている状態であることを示していた。
サタンは再び伊吹の唇に自分の唇を重ねると何度か音を立てて小鳥が餌をついばむ時のように軽いロづけをした。
そして再び唇同士を軽くこすり合わせるとまるで伊吹の出方を見るかのように自身の唇と唇の間で挟んだり舌先で舐めたりを繰り返した。
サタンが伊吹の唇に愛撫をしている最中うっすらと目を開け伊吹の表情を確認すると伊吹は両目を閉じうっとりとサタンの愛撫を味わっていた。
（ああ・・・そう言えば伊吹はキスされるとセックスがしたくなっちゃうんだったっけ。）
サタンは少し安心すると伊吹の唇を自身の唇で完全に覆い伊吹の口の中に舌を入れた。
するっと伊吹の口の中に舌が入ったのを感じると自身の舌先で伊吹の舌を軽く叩き舌を出すように促してみた。
「ん・・。」
サタンの行動の意味が理解できたかのか伊吹は小さく声を出すとゆっくりとした動きで自身の舌をサタンの口の中に突き出した。
サタンは伊吹の舌が自分の唇の手前まで来たのを確認すると伊吹の舌先をねっとりと舐め自身の唾液を伊吹の舌に絡めた。